

平成 30 年度ユネスコスクール年次活動調査報告分析
児童生徒の変化と授業内容・カリキュラムの変化についての考察

宮城教育大学 教授 市瀬智紀

目次

1. 児童生徒の変化(認知領域).....	1
2. 児童生徒の変化(社会・情動領域).....	2
3. 児童生徒の変化(行動領域).....	4
4. 児童生徒の変化(過去のデータとの比較).....	5
5. 授業内容・カリキュラムの変化.....	8

<図表目次>

表 1:児童生徒の変化(認知領域) 抽出語上位 30 語.....	1
表 2:児童生徒の変化(社会・情動領域) 抽出語上位 30 語.....	3
表 3:児童生徒の変化(行動領域) 抽出語上位 30 語.....	4
表 4:自由記述における頻出コード(2015～2017 年度).....	6
表 5:自由記述における頻出コード(2018 年度).....	7
表 6:授業内容・カリキュラムの工夫 抽出語上位 30 語.....	8
表 7:自由記述における頻出コード(2015～2018 年度).....	10

本報告は、児童生徒の変化と授業内容・カリキュラムの変化に関する自由記述(Q27～29 およびQ35)についての考察である。ユネスコスクール加盟とESDの推進拠点となったことによる児童生徒の変化については、前年度までは、どのような変化がみられたか「効果(児童生徒の変化)」として質問していた。本年度は、児童生徒の変化について、認知領域、社会・情動領域(感情面)の3つに分けて質問している。そこで、まず2018年度の3つの分野の回答について分析を行ったあと、2015年度～2017年度までの結果と比較する。授業内容・カリキュラムについての質問項目は、前年度までの質問の枠組みとほぼ共通しているため、本年度の記述の分析と4年間の連続した傾向と変化について考察する。考察の方法としては、Khcoderによって、語の出現頻度を調べた。また、語と語のつながり(共起関係)を確認したうえで、コーディングルールを作成し、共起関係にある語の出現割合を調べる手法を用いた。

1. 児童生徒の変化(認知領域)

児童生徒の変化について認知領域での変化の内容を具体的に記述してください(2. ユネスコスクール加盟による効果、②、質問1)。

表 1: 児童生徒の変化(認知領域) 抽出語上位 30 語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
地域	223	考える	67	社会	48
活動	134	知識	65	課題	47
自分	130	自然	64	深まる	47
理解	124	文化	61	問題	45
学習	123	増える	56	深める	44
生徒	109	考える	67	世界	42
知る	109	高まる	53	見る	38
環境	91	ユネスコ	51	交流	38
意識	71	児童	51	スクール	37
関心	71	特に	50	学ぶ	37

Q27 の全体の回答件数は 659 件であった。表1は抽出語の上位 30 語を取り出したものである。地域(223 回)(カッコ内は出現回数)、活動(134)、自分(130)、理解(124)といった語が上位を占めている。地域での活動を通じた地域への理解、地域の環境(91)や自然(64)についての理解、地域と自分との関係を意識(71)し、関心(71)が高まったことに言及する記述が多くみられた。具体的には「地域や社会の問題を自分事として認知し、課題を解決しようとする姿勢に成長が見られた」「地域と関わる活動を通して、その良さを実感しながら理解することができた」といった記述が挙げられる。また、そうした記述について、具体的な事例と結びつけながら認知領域での変化として挙げる記述が多くみられた。

「自分達で世話して収穫することができた農作物を地域の方に販売するときに、地域の方々の温かさを感じ、自分たちが住む地域のよさを感じることができた」「地域を素材とした「地域体験学習」「環境学習」等により、地域の文化財や環境についての理解や関心を深めることができた」「地域の行事や遺跡を知るとともに、地域の人々と接する中で、地域を守りたい、伝統を伝えていきたい、といった願いに接し、活動への意欲を高めていた」といった記述がそれに相当する。

一方で、中等教育学校や高等学校では、世界(42)地球的課題について多く言及されている。例えば、「海外の生徒達との交流や海外研修を行い、地球規模の課題(環境・資源・生物多様性・貧困・紛争)に気がついた」、「ユネスコスクールネットワークの活動を通じて、それまで知ろうとしなかったような世界の諸課題について知ようになり、学ぼうとする姿勢が育っている。また、異なる視点があることも学んでいる」といった記述がそれに相当する。

また、本年度の特徴としては、SDGs に言及した記述が多くみられ、全体で 31 件の SDGs に関する言及があった。一方で、それら児童生徒の変化について、何も変化がないとする「特になし」の記述が 21 件あったことにも留意すべきであろう。

2. 児童生徒の変化(社会・情動領域)

社会・情動領域(感情面)での変化の内容を具体的に記述してください(2. ユネスコスクール加盟による効果、②、質問1)。

表 2:児童生徒の変化(社会・情動領域) 抽出語上位 30 語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
地域	275	意識	73	関心	42
自分	151	児童	71	思う	41
活動	113	感じる	69	育つ	40
気持ち	103	学習	59	文化	40
生徒	99	環境	55	見る	39
大切	99	知る	52	思い	38
高まる	82	社会	51	守る	37
増える	81	持つ	48	特に	36
考える	80	交流	46	積極	33
人	76	自然	45	問題	33

Q28 の全体の回答件数は 660 件であった。表 2 からわかるように、この質問項目においても、地域(275)、活動(113)といった語が頻出している。Q27 と同様に地域での活動を通じた地域への理解、地域の環境(55)や自然(45)についての認識について言及する例が多いが、特に本質問項目では、社会・情動領域の質問であることから、そうした活動が、生徒の情意にどのような影響を与えたのか、その「気持ち(103)」についての記述がみられる。

「豊かな自然や特色ある行事や産業に対する関心や誇り、行事や産業等を支える方々への感謝や親しみの心が培われてきている」「ボランティア活動に参加することにより、相手の立場や気持ちを考える生徒が出てきた」というように、対象者としての地域の人(76)に対する「感謝」「親しみ」「共感」、さらに「地域に対する理解が深まり、地域愛のようなものが育っていると感じている」「自分たちの身近な自然や伝統文化について学習することにより、地域を理解し愛する気持ちが少しずつ育ってきている」といったように、自身の地域や自然環境、伝統分野への愛着について多く記述されていた。

「やりがい」や「充実感」も情動面でよく取り上げられている。「自分たちが開発した商品を、実際にお客さんがお金を出して購入してくれたことに対し、充実感をもった」「人の先頭に立って、何かを成し遂げることのやりがいを感じることができた」といった記述がそれに相当する。

中等教育学校や高等学校では、地球的課題への取組みが情動面に与える変化について記述がみられる。「地球上で起きている貧困や差別、地球環境問題といった課題に関心を寄せる生徒が増加した」「実際に目の前にいない障害のある方や発展途上国の人の事を考え、その人の為に何が出来るのか考えることができるようになり、視野が広がった」といった記述が代表的といえる。ここでは「関心を寄せる」ことや「視野が広がる」ことについて記述されている。最後に本質問項目において、児童生徒の変化について「特になし」としている記述が 17 件あったことも留意すべきであろう。

3. 児童生徒の変化(行動領域)

行動領域での変化の内容を具体的に記述してください(2. ユネスコスクール加盟による効果、②、質問 1)。

表 3: 児童生徒の変化(行動領域)抽出語上位 30 語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
活動	252	ボランティア	79	意識	40
地域	207	考える	72	多い	39
参加	137	行う	72	学校	36
自分	131	取り組む	67	特に	36
生徒	131	姿	57	自ら	35
積極	127	学習	56	人	35
増える	110	交流	49	課題	34
行動	107	環境	44	進む	34
見る	105	意欲	41	関わる	33
児童	86	行事	41	発表	32

Q29 の全体の回答件数は 660 件であった。地域(207)の活動(207)に積極(127)的に参加する生徒が増えた(110)ことが、行動面の成果として記述されることが多い。積極的な活動の具体例としては、ボランティア(79)への言及が多い。具体的には、「地域や自然について、より深く知りたいと調べたり、積極的に関わったりする子どもが増えた」「実際に地域のために働くことや、ボランティアを行う生徒が増えた」といった記述がそれに相当する。自分でできることをするようになったといった記述も多くみられる。「児童が地域の環境などの課題に気付き、自分たちで解決できることに取り組むようになった」「自然を守るために、自分たちにできることに取り組んでいる(ポイ捨てをしない・食器を拭いてから洗う・電気をこまめに消す・川や海を汚す行為をしない等)」

コミュニケーションや、インタビューや発言・発表あるいは挨拶など、人とのかわりに着目する記述も多くみられた。「友達同士、地域の人との関わりが多くなったことで、コミュニケーション能力を高め、積極的に取り組もうとする意欲が高まった」「地域の課題解決やボランティア活動等への積極的な参画や発言機会の増加」「地域教材に興味をもつと同時に、インタビュー活動や調べたことをまとめる活動に意欲的に取り組めるようになった」といった記述がそれに相当する。最後に、児童生徒の変化について「特になし」としてある記述が 27 件と多くみられたことにも留意すべきであろう。

4. 児童生徒の変化(過去のデータとの比較)

さて、次に、こうした児童生徒の変化が、例年と比べて特徴的なものであるのか、過去のデータとの比較の上で分析してみたい。

上述したように、2015 年、2016 年、2017 年は、上述の内容について、効果(児童生徒の変化)で一つの質問項目としていた。例年のデータの中でも、「地域の自然環境に興味関心が高まった」「身近な問題・課題の解決」「国際理解が深まった」「伝統文化」「愛する気持ちが育った」「物事に対する広い視野」「主体的に取り組む」「コミュニケーション能力」といった認識が共通して存在している。そこで、本調査は、同じような認識が全体のコメントの中でどれくらいの割合を占めているのかについて知るために、コーディングルール(コーディングルールとは「特定の表現があればコンセプトが出現していたと見なす」といったルール)を作成した。2015～2017 年のデータについて、例年の傾向から、以下のような認識のまとまりをコーディングとして設定した。

- * 地域環境「(地域／郷土／ふるさと)の(自然／環境)に(興味／関心／意識)が高まる」
- * 国際理解「(国際／世界／グローバル／地球／海外)への理解が深まる」
- * 課題解決学習「課題解決学習を行う」

- * 愛着「ふるさと／地域への愛着」
- * コミュニケーション「コミュニケーション能力が向上／高まる」
- * 視野「視野が広がる」
- * 伝統文化「伝統文化や歴史遺産(についての取組み)」
- * 主体性「自分／自ら主体的に取組む／考える」
- * ボランティア「ボランティア活動に参加する」

そのコーディング結果を示したのが以下の表である。コーディングを実行した結果、これらのコードのある記述だけで全体の記述量の 60%以上を占めていることがわかった。

表 4: 自由記述における頻出コード(2015～2017 年度)

年度(コメント数) コード	2015 年度 (425)	2016 年度 (931)	2017 年度 (643)
* 地域環境	47.06%	42.96%	40.59%
* 国際理解	12.00%	11.28%	15.71%
* 課題解決	6.35%	7.52%	7.93%
* 愛着	7.29%	3.87%	7.00%
* コミュニケーション	9.88%	4.62%	4.98%
* 視野	4.94%	4.08%	4.67%
* 伝統文化	3.29%	2.26%	4.04%
* 主体性	5.18%	4.83%	2.33%
* ボランティア	2.82%	1.72%	2.02%
#コード無し	33.88%	40.82%	41.06%

3 年間を通して、「地域／郷土／ふるさとの自然／環境に興味／関心／意識が高まる」という認識は、全体の 40%以上を占めている。「国際／世界／グローバル／地球／海外への理解」は 11%～15%である。そのほか「課題解決学習を行う」「ふるさと／地域への愛着」「コミュニケーション能力が向上／高まる」

「視野が広がる／広まる」「伝統文化や歴史遺産(についての取組み)」「自分／自ら主体的に取組む／考える」「ボランティア活動に参加する」等が恒常的に出現している。

このコードを、2018年度の調査に当てはめてみたのが、表5である。上述のように質問形式が変更されており、また、コメント数も同一ではないので、単純に比較することはできないが、ここにおいては、地域の自然環境や国際理解、伝統文化への理解といった認識が認知領域において回答され、コミュニケーション力や愛着が強まるといった認識が、社会・情動領域で回答され、主体性のある取組やボランティア活動への参加といった認識が行動領域で回答されているとみることができるのではないだろうか。

表 5: 自由記述における頻出コード(2018年度)

領域(コメント数) コード	認知領域 (727)	社会・情動領域 (729)	行動領域 (728)
* 地域環境	33.43%	35.25%	25.55%
* 国際理解	12.93%	6.86%	4.53%
* 課題解決	6.60%	4.25%	3.30%
* 愛着	2.89%	7.54%	0.82%
* コミュニケーション	10.04%	12.48%	4.53%
* 視野	2.48%	0.82%	0.96%
* 伝統文化	4.81%	2.88%	0.69%
* 主体性	1.24%	2.33%	6.87%
* ボランティア	0.28%	0.69%	4.67%
#コード無し	48.14%	49.38%	59.20%

5. 授業内容・カリキュラムの変化

Q35. 変化の内容を具体的に記述してください(授業内容、カリキュラム編成の工夫等)

表 6: 授業内容・カリキュラムの工夫 抽出語上位 30 語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
学習	311	指導	79	考える	50
活動	186	計画	75	取り組む	49
授業	153	特に	61	取り入れる	48
総合	131	意識	58	工夫	45
時間	111	児童	56	実施	43
カリキュラム	105	教育	55	編成	41
教科	104	生徒	53	視点	38
地域	100	課題	51	変化	38
行う	95	学年	51	学校	37
内容	90	横断	50	関連	37

Q35 の回答件数は、637 件であった。学習(311)活動(186)における指導(79)計画(75)の改善について多くの記述が得られている。特に、総合(131)学習の時間(111)の活用、地域(100)の活用、教科(104)横断(50)型学習、課題(51)解決型学習の 4 つの事項への言及が多い。

地域を活用した学習では、「地域人材の活用による、体験活動。課題を自分のこととして捉える探求的で主体的な学習を目指して取り組んでいる」「地域人材を活用したカリキュラムにより、子どもの学び方がより主体的な学びに変化している」「総合的な学習の時間で地域の問題に取り組むようにした。探究的な学習を進めていくために、活動的な部分、アクティブラーニングを念頭に置いた授業の研究と計画。といった記述が典型的である」といった記述がみられる。

教科横断型学習については、「教科・科目の横断的な授業の展開」「総合的な学習の時間を中心とした教科横断型指導計画の作成を行った」といった記述が多いが、2018 年は学習指導要領の改訂にあわ

せて、カリキュラム・マネジメントについて言及する記述がみられる。「教科領域のカリキュラムを横断的に組むことができた。カリキュラム・マネジメントにつながった」「カリキュラム・マネジメントを実践していきながら、ESD カレンダーの充実を図ることができた」といった記述がその典型である。

課題解決・探求型学習については、「課題を自分のこととして捉える探求的で主体的な学習を目指して取り組んでいる」といった記述が多くみられた。教師主導から生徒主体の課題解決型に変化したことが、教授法の変化として記述されている。

本質問項目において「特に変化なし」とする意見は 37 件であった。

さて、本年度の質問項目は、従来の活動調査の質問項目「ユネスコスクールに加盟し、ESD の推進拠点になったことで、どのような効果がありましたか。その効果のあった内容及び効果があったと考えられる要因(教授法の変化)について具体的にお答えください」と重なる質問になっている。

前年度までの結果を見ると、2015 年度～2017 年度の 3 年間も、本年度と同様に、「教科横断型カリキュラムを設定している」「総合的な学習の時間中心である」「体験活動を重視している」「子ども・生徒主体の授業が行われている」「課題解決課題解決型の学習を行っている」「地域を活用する機会がふえた」「ESD カレンダーを作成・活用している」「アクティブラーニングの手法を用いている」といった認識が共通して存在している。そこでコーディネートルを作成し、こうした認識が、全体の記述の中でどのような割合を占めているのかを調べた。

*教科横断「教科／学習横断型またはクロス・カリキュラム(を設定している)」

*体験活動「体験的な学習／活動(をしている)」

*生徒主体「生徒主体の学び／学習(が行われている)」

*地域活用「地域／ふるさと／郷土／地元(を活用している)」

*総合学習「総合(的な)学習の時間(を利用している)」

*課題解決「問題 /課題解決型の学習(を行っている)」

*ESD カレンダー「ESD カレンダー(を作成・活用している)」

*カリキュラム・マネジメント「カリキュラム・マネジメント(を行っている)」

表 7:自由記述における頻出コード(2015～2018 年度)

年度(コメント数) コード	2015 年度 (262)	2016 年度 (222)	2017 年度 (579)	2018 年度 (723)
* 教科横断	19.85%	17.57%	12.61%	13.55%
* 体験活動	19.47%	12.61%	19.00%	19.09%
* 生徒主体	38.93%	31.53%	32.47%	41.91%
* 地域活用	1.53%	1.80%	2.07%	3.04%
* 総合学習	8.78%	6.31%	3.80%	11.89%
* 課題解決	4.20%	6.31%	5.01%	3.46%
* ESD カレンダー	21.37%	20.27%	16.41%	10.10%
* アクティブラーニング	6.87%	6.31%	2.94%	2.07%
* カリキュラム・マネジメント	0.38%	0.90%	0.86%	1.52%
#コード無し	37.79%	41.89%	47.15%	44.81%

毎年記述量が異なることや、2018 年度は質問形態が変わったことは考慮しなければならないであろうが、4年間にわたって、これらのコードのある記述だけで記述の5割以上を占めている。生徒主体については30%以上、体験活動については、12～19%、教科横断については12～19%、地域活用や、課題解決型学習などについても、一定の割合で4年間を通じて言及されている。年度別の変化をみると、2018 年度は地域活用についての言及が増えている。ESD カレンダーについて、徐々に言及が減っている原因はわからないが、活用が一般化したためであるかもしれない。アクティブラーニングは、2015 年当時は、強く意識されていたが、新学習指導要領の改訂とともに「主体的・対話的で深い学び」といった言い方が広まったこともあってか、生徒の主体的な学習(活動)といった活動の記述が多くなり、アクティブラーニングへの言及は減っている。一方、2018 年は、カリキュラム・マネジメントへの言及が増えてきていることも指摘できる。

おわりに

以上の考察から、ESD の推進による児童生徒の変化と授業内容・カリキュラムの変化についてまとめてみると次のように言えるであろう。ESD 推進の結果、地域理解、国際理解、伝統文化理解といった側面が認知面での成果として言及される。そして、地域の自然や人々に対する愛着や感謝、親しみ、共感、生徒自身の充実感が、情意面での成果として挙げられる。行動面では、活動や学習への積極的な取組みの例示としてボランティア活動への参加が多く言及されるが、コミュニケーションや、インタビュー、発言・発表あるいは挨拶など、他者への働きかけが多くなったことに注目するケースも多いことがわかった。

教育方法面での成果については、総合学習の時間の活用、地域の活用、教科横断型学習、課題解決型学習が成果として継続して取り上げられているが、4年間を通してしてみると、アクティブラーニングや、カリキュラム・マネジメントなど、その時々の特ピックとしての教育的手法がESDの成果として言及されていることに注目すべきであろう。